

大会会長あいさつ

日本スプリント学会長 高野 進

本年 8 月には皆様においてはご承知の通り、ロンドン五輪が盛大に開催され、日本国民ならず世界人類の目が陸上競技のスプリント種目に注がれました。本学会役員ならびに会員の諸氏が日本代表選手団の役員となり、選手の活躍にわずかながらでも貢献したものと自負しております。また次の日本チームへの貢献を果たすべく、本学会が先進的にスプリント学の追求をさらに進めていかななくてはならないものと考えます。

さて本年の一大イベントでもあります日本スプリント学会第 23 回大会が城西大学坂戸キャンパスにて開催される運びとなりました。本年のテーマとして「日本 4×100m リレー これまでとこれから」といった内容で 4×100m リレーを主体として展開される予定です。強化体制の観点、国立科学センターの科学スタッフを中心としたマルチサポート事業による観点等の視野から多面的に検証していければと存じます。ロンドン五輪では男子日本チームは日本歴代第 2 位の好記録を出し、決勝でのメダル獲得を意識したレースを展開してくれたのは印象に残ることと存じます。もはや 5 位という立派な結果でありながら、とても残念な結果と感じてしまうほどの継続的な入賞は今一度評価されるべきであり、今後のチーム力強化のための方向性や指針を探る上で極めて重要な案件であると考えます。

また、400m ハードルで世界選手権大会において 2 度の銅メダルを獲得した為末 大選手にお越し頂き、今シーズンで引退されて今までの競技人生を振り返ってご講演いただく予定です。日本スプリント界を長らく牽引してこられた中での様々な考えを整理されたお話は学会員の皆様に何かしらの今後の競技や指導の現場にヒントを与えてくれるものと考えます。

これらのように結果に至るまでのあらゆるプロセスを本学会大会では明らかにしていき、学会員の忌憚なき意見やアイデアを結集し、今後の日本スプリント界を盛り上げていける材料になってくれることを期待しております。

最後になりましたが学会大会を開催するあたり、多大なる御協力、御支援を賜ります城西大学の関係各位に感謝の意を表すとともに学会大会が成功裏に終わることができるよう関係各位にお願い申し上げます。

運営委員長あいさつ

城西大学経営学部 土江 寛裕

今年の8月は、世界中の注目がロンドンオリンピックに集まりました。日本は、特に団体種目での活躍が目立ち、メダル獲得数は過去最高を数え、国民の期待に応えました。

一方で陸上競技は多くの種目が苦戦するなか、男子短距離は比較的奮闘しました。男子100mでは山縣亮太選手（慶大）が、オリンピックという大舞台で10秒07の自己ベストをマークし、準決勝進出を果たし、新たな日本の大黒柱としても楽しみな選手が出現しました。また200mでも高平慎士選手、高瀬慧選手（ともに富士通）が準決勝に進出しました。そして、ここ数年苦戦してきた4×100mリレーでも、山縣—江里口匡史（大阪ガス）—高平—飯塚翔太（中大）のメンバーで、38秒07の日本歴代2位の好記録で決勝進出を果たし、決勝ではシードレーンを獲得しました。残念ながら結果は5位に終わりましたが、5位で「残念」と思える、レベルの高いチームに仕上がりました。

1988年のソウル大会で、1964年東京大会以来のリレー派遣が実現して以降、1992年の6位、2000年6位、2004年4位、2008年銅メダル、2012年5位と、5回のオリンピックで入賞、世界選手権でも数多くの入賞の実績を上げてきました。この種目において日本は、世界からも強豪国の1つに認識されていると思われます。この背景には、日本スプリントの個人レベルの向上や、巧妙なバトンパステクニックの向上、さらにはそれらを客観的、科学的に支えた、国立スポーツ科学センター、マルチサポート事業による科学スタッフのバックアップなどがあります。

しかしながら、100mではウサインボルトの9秒63のオリンピック新記録、さらに4×100mリレーではジャマイカ男子の37秒の壁突破、アメリカ女子の41秒の壁突破と、世界も着実に新たなステージへ進化しており、日本もレベルアップしているとはいえ、男女ともに、また4×100、4×400両リレーともに、世界との差はさらに広がっていることは否めません。今後も世界と対等に戦うために、新たな戦略を立てる必要がある時期に来ているといえます。

今大会の主なテーマとして、特に4×100mリレーにスポットをあて、この20年にわたる日本男子4×100mリレーの取り組みの「これまで」を、中心で指揮を取られてこられた高野進先生（東海大学、前日本陸連強化委員長）に振り返っていただくとともに、積み上げられた科学的データを松尾彰文先生（国立スポーツ科学センター）に紹介していただきたいと思えます。また、さらには今後、レベルアップする世界に対してどのように対抗するか、「これから」の展望も、現役選手を含めてディスカッションしていきたいと考えております。また2日目には、日本チームが取り組んできた「アンダーハンドパス」を中心に、リレーバトンパスでのパフォーマンスを最大限に引き出すためのトレーニング方法を、城西大学陸上競技部のリレーメンバーとともに紹介できればと考えております。

また、400mハードルで世界選手権2度の銅メダルを獲得し、その他様々な輝かしい成績をおさめられた為末大選手ですが、今シーズンで競技の第一線を退かれました。その為末選手の引退を記念し、ご講演頂けることになりました。「越えられなかったハードル～失敗を考える」という、成功者による失敗についてのお話、大変興味を引きます。

最後に、大会開催の時期が差し迫ってのご案内になってしまいましたことをお詫び申し上げますと同時に、多くの皆様にご参加いただきますよう、よろしくお願ひ申し上げます。

日本スプリント学会第23回大会役員

大会顧問	阿部征次 大久保文彦 塘添敏文 山口政信	安藤好郎 澤村博 永島正俊 渡部近志	伊藤宏 鈴木秀次 宮川千秋 渡部誠	植屋清見 竹田憲司 宮下憲
大会会長	高野進			
大会副会長	原田康弘	川本和久	大森重宣	麻場一徳
大会委員	青山清英 伊東浩司 金子公宏 串間敦郎 佐藤正伸 田辺潤 二瓶秀子 森田正利 若浦直樹	麻場一徳 太田涼 荻部俊二 栗原浩司 杉本龍勇 谷川聡 原悦子 安井年文	有川秀之 小木曾一之 北村肇 児玉育美 清田浩伸 土江寛裕 森丘保典 山崎一彦	磯繁雄 小倉幸雄 金高宏文 櫻田淳也 高須明 豊田裕浩 森長正樹 吉野謙二

日本スプリント学会第23回大会運営委員会

委員長	土江寛裕		
委員	安井年文 千葉佳裕 嶋崎佑志 飯村郁巳 野川大地 赤司かずみ	櫻田淳也 信岡沙希重 萩原洋輝 相山征之 佐藤友弥	豊田裕浩 小林海 本間圭祐 桜井大幹 佐藤慧太

大会日程

第1日 12月22日(土)

12:30	受付	清光会館清光ホール
13:00	開会式	清光会館清光ホール
13:10~15:10	シンポジウム 「日本男子4×100m リレーこれまでとこれから」 ・高野 進(東海大学) ・松尾彰文(国立スポーツ科学センター) ・苅部俊二(法政大学) ・朝原宣治(大阪ガス) ・高平慎士(富士通) コーディネーター ・安井年文(青山学院大学)	清光会館清光ホール
15:10~15:40	協賛企業プレゼンテーション	清光会館清光ホール
15:50~16:50	引退記念講演 「越えられなかったハードル~失敗を考える」 ・為末 大(meme) コーディネーター ・櫻田淳也(東京女子体育大学)	清光会館清光ホール
17:00~	懇親会(参加費3,000円)	17号館カフェテリア

第2日 12月23日(日)

9:00~	受付	清光会館清光ホール
9:15~9:45	総会	清光会館清光ホール
9:50~11:00	一般発表 座長 小林 海(目白大学) 1. レッド・コードのスポーツ・トレーニングの効用に関する調査 —男女スプリンターの主観的な感想からの推測— ○平井敏幸(北海学園大学) 苅部俊二(法政大学) 広川龍太郎(東海大学) 麻場一徳(都留文科大学) 中村宏之(北海道ハイテクAC) 2. スローボードを利用したスタートダッシュによる即時的効果 ○千葉佳裕(城西大学) 山岸路典(ニシ・スポーツ) 信岡沙希重(ミズノ) 土江寛裕(城西大学)	清光会館清光ホール

3. 幼児，児童の足把持力とスプリント力の関係

○大森重宜（金沢星稜大学人間科学部） 宮原 綾（ツエーゲン金沢）

4. 陸上競技男子400m走におけるスピード低下量からみたタイプを考慮した

モデルレースパターン作成の試み

○山元康平（筑波大学大学院研究生） 宮代賢治（筑波大学大学院）

内藤 景（筑波大学大学院） 木越清信（筑波大学）

大山卞圭悟（筑波大学） 宮下 憲（帝京大学）

5. 短距離走における疾走速度と遊脚の動作との関係

○木越清信（筑波大学） 加藤彰浩（愛知教育大学）

6. 女子大学生短距離選手の試合期における疾走動作の個人内変動

○遠藤俊典（青山学院大学社会情報学部） 本道慎吾（青山学院大学教育人間科学部）

藤井宏明（環太平洋大学） 杉本和那美（青山学院大学教育人間科学部）

安井年文（青山学院大学教育人間科学部）

7. 北信越インターハイ女子400m競技における予選から決勝への相対的記録への推移

ーマントル・モンショー選手のような戦略はあったのかー

○小笠原隆夫（J R P Oマスターズクラブ）

11:20～12:30 ワークショップ

総合グラウンド

「4×100mリレーバトンパスのトレーニング方法」

・土江寛裕（城西大学） 千葉佳祐（城西大学） 信岡沙希重（ミズノ）

・城西大学陸上競技部 部員

・地域高校生，中学生参加希望者（若干名）

注）雨天・寒冷の場合は，総合体育館で実施します。上履きをご用意下さい。

9:10～12:30 企業展示説明

清光会館清光ホール入口前

「業者による練習・トレーニング機器展示説明」

12:30 閉会予定

清光会館は図中③
総合グラウンドは⑬
カフェテリアは⑥



～ シンポジウム ～

「日本男子 4 × 100m リレーのこれまでとこれから」

1) ビデオ上映 (TBS テレビ協力)

日本 4×100m リレーのこれまでの取り組み

2) 講演 1

「男子 4 × 1 0 0 m リレー強化の取り組み」

高野 進 (東海大学)

日本陸上競技連盟の男子短距離強化部長として短距離全般を任されたのは 1998 年のバンコクアジア大会からである。同大会で 4 × 1 0 0 m リレーにおいて金メダルを獲得したが、翌年のセビア大会においては、エースの故障や個々のレベルが停滞していたという理由から 4 × 1 0 0 m リレーの派遣を見送った。

2000 年には円熟味をましてきた伊東選手と朝原選手、若手売り出し中の末續選手や小島、川畑選手らの台頭を機に再度リレーチームを編成し、シドニーオリンピックにおいて入賞を果たすことができた。その後、バトンパスワークをこれまでのオーバーハンドパスからアンダーハンドパスに切り替えることとした。理由は、当時私が考えていた走法では加速局面において高く腕を上げることは著しく減速につながるのではないかと考え、接近してバトンの受け渡しをするアンダーハンドパスの方が、練習時間が限定されている日本代表には合っているという考えからであった。

以後、男子日本代表チームはシドニーオリンピックからロンドンオリンピックまで 4 大会連続で入賞を果たし、世界からも一目置かれる存在となった。しかし、今後さらなる飛躍を目指す上で、これまでのパスワークや強化システムを検証し、今後の課題などの洗い出しも同時に行なって行ければ良いのではないかと考えている。

演者プロフィール

静岡県出身

1961 年 5 月 21 日生まれ

東海大学大学院

1997 年～2006 年 日本陸上競技連盟強化委員会男子短距離部長

2007 年～2012 年 日本陸上競技連盟強化委員長

男子 400m の日本記録 (44 秒 78) 保持者

1991 年東京世界陸上、1992 年バルセロナオリンピック男子 400m において決勝進出、

日本陸連強化委員会男子短距離部長、強化委員長を歴任し、2003 年パリ世界陸上男子 200m 銅メダルの末續慎吾や塚原直貴など、多くの選手を育てる。

3) 講演2

「ロンドンオリンピックに向けた男子4×100mリレーへの科学的サポート」

松尾 彰文 (国立スポーツ科学センター)

日本男子短距離チームはロンドンオリンピックでもメダル獲得を目標にして強化してきた。それを陸連科学委員会と国立スポーツ科学センターでは科学的側面からサポートしてきたので、その活動について報告する。

リレーのサポートとして競技会では、リレーゾーンの通過タイムをハイスピードビデオ映像から詳細に分析し、シーズン直前の代表合宿のバトンパス練習でもゾーン通過タイム分析をおこない科学的データを提供してきた。また、候補選手を対象に100mと200mのレース中のスピード、ピッチとストライドの変化をレーザー速度計測装置やハイスピードビデオ映像から分析してその結果を提供してきた。IAAFの100mと200mのリストからみた日本選手のランキングやロンドンオリンピックでのバトンパス分析の結果からみると、バトンパス技術の向上により37秒台も、そして、次のオリンピックでのメダル獲得も夢ではない。

演者プロフィール

大阪府出身

昭和27年(1952年)09月27日生

順天堂大学卒業

国立スポーツ科学センタースポーツ科学研究部副主任研究員

日本陸上競技連盟科学委員として、短距離、リレーチームを科学的にバックアップし、様々な有益な情報を選手やチームにもたらしてきた。

北京での銅メダル、これまでの連続入賞に大きく貢献している。

4) パネルディスカッション

「日本4×100m リレーのこれまでとこれから」

パネラー

■高野 進 (東海大学)

■松尾 彰文 (国立スポーツ科学センター)

■荻部 俊二 (法政大学)

1969年5月8日生まれ

法政大学健康スポーツ学部准教授

前日本陸上競技連盟男子短距離部長

2008年北京五輪、2012年ロンドン五輪で男子4×100m リレーを率いる。2008年北京では銅メダルを獲得する。自身は400m、400m ハードルの選手として、1996年アトランタ、2000年シドニーのオリンピック3大会に出場。

■朝原 宣治 (大阪ガス)

1972年6月21日生まれ

大阪ガス陸上競技部コーチ

兵庫夢の台高校→同志社大学→大阪ガス

日本の100m スプリンターの第一人者として活躍。1996年アトランタ、2000年シドニー、2004年アテネ、2008年北京のオリンピック4大会に出場し、100m とともに4×100m リレーメンバーとして出場、2008年の北京では銅メダルを獲得。100m の自己ベストは10秒02 (日本歴代2位)

■高平 慎士 (富士通)

1984年7月18日生まれ

富士通陸上競技部所属

北海道旭川大学高校→順天堂大学→富士通

2004年アテネ、2008年北京、2012年ロンドンのオリンピック3大会に出場、北京では銅メダル獲得。200m を専門とし、得意のカーブ走を生かして、不動の第3走者として活躍している。

コーディネーター

安井 年文 (青山学院大学)

～ 引退記念講演 ～
「越えられなかったハードル ～失敗を考える」

演者 為末 大 (meme)

1978年5月3日生まれ

広島県出身

広島皆実高校→法政大学→大阪ガスほか

25年間現役を続けてきて、様々な失敗をしてきた。全てがうまくいったわけではなくて、結局越えられなかったものもある。失敗によって学ぶ事は多いけれど、多数の失敗を許されているほど競技人生は長くない。

比較的失敗というものは表に出ず、共有もされにくいけれども、失敗を共有する事で次世代の選手達には大きな参考になると思う。私自身先人の失敗をよく研究し、それを参考にした事により、より高い次元での失敗をする事ができたと思っている。

今回私自身の失敗を共有する事で、経験が次世代に繋がるきっかけになればと思っている。

プロフィール

400m ハードルの第一人者として活躍。2001年世界陸上エドモントン大会、2005年世界陸上ヘルシンキ大会で400m ハードルにおいて銅メダルを獲得。オリンピックは2000年シドニー、2004年アテネ、2008年北京の3大会に出場。ロンドン五輪を目指して挑戦したが、2012年の日本選手権を最後に現役を引退。中学では短距離を専門とし、200mの中学日本新記録を樹立。高校で400m、400mハードルに転向し、いずれも高校日本新記録を樹立する。

実業団を飛び出して陸上のプロ選手と活動、執筆活動を行うなど、斬新な考えや活動で話題を呼んだ。現在は「為末大学」などの活動でも注目を集めている。

～ ワークショップ ～

「4 × 100m リレーバトンパスのトレーニング方法」

土江寛裕（城西大学）

千葉佳裕（城西大学）

信岡沙希重（ミズノ）

日本男子 4×100m リレーチームは、2000 年シドニーで 6 位、2004 年アテネで 4 位、2008 年の北京五輪で銅メダル、2012 年のロンドン五輪でも 5 位入賞と、五輪 4 大会連続入賞を果たしました。世界の 9 秒台スプリンターを多く有する国々と、日本人選手が対等に戦うためには洗練されたバトンパスの技術があったことは有名です。

今回のワークショップでは、日本チームが取り組んできた「アンダーハンドパス」を中心に、リレーバトンパスでのパフォーマンスを最大限に引き出すためのトレーニング方法を、城西大学陸上競技部のリレーメンバーとともに紹介したいと思います。

プロフィール

土江寛裕（城西大学）

城西大学経営学部 准教授 城西大学陸上競技部 監督

1974 年 6 月 14 日生まれ

島根出雲高→早稲田大学→富士通→早稲田大学大学院→城西大学
博士（人間科学）

千葉佳裕（城西大学）

城西大学非常勤講師 城西大学陸上競技部コーチ

1979 年 4 月 29 日生まれ

埼玉栄高→順天堂大→富士通→トヨタ紡織

信岡沙希重（ミズノ）

ミズノ

1977 年 8 月 24 日生まれ

伊奈学園総合高→早稲田大学→ミズノ